

村島宮の首遺跡 現地説明会資料

令和6年8月3日

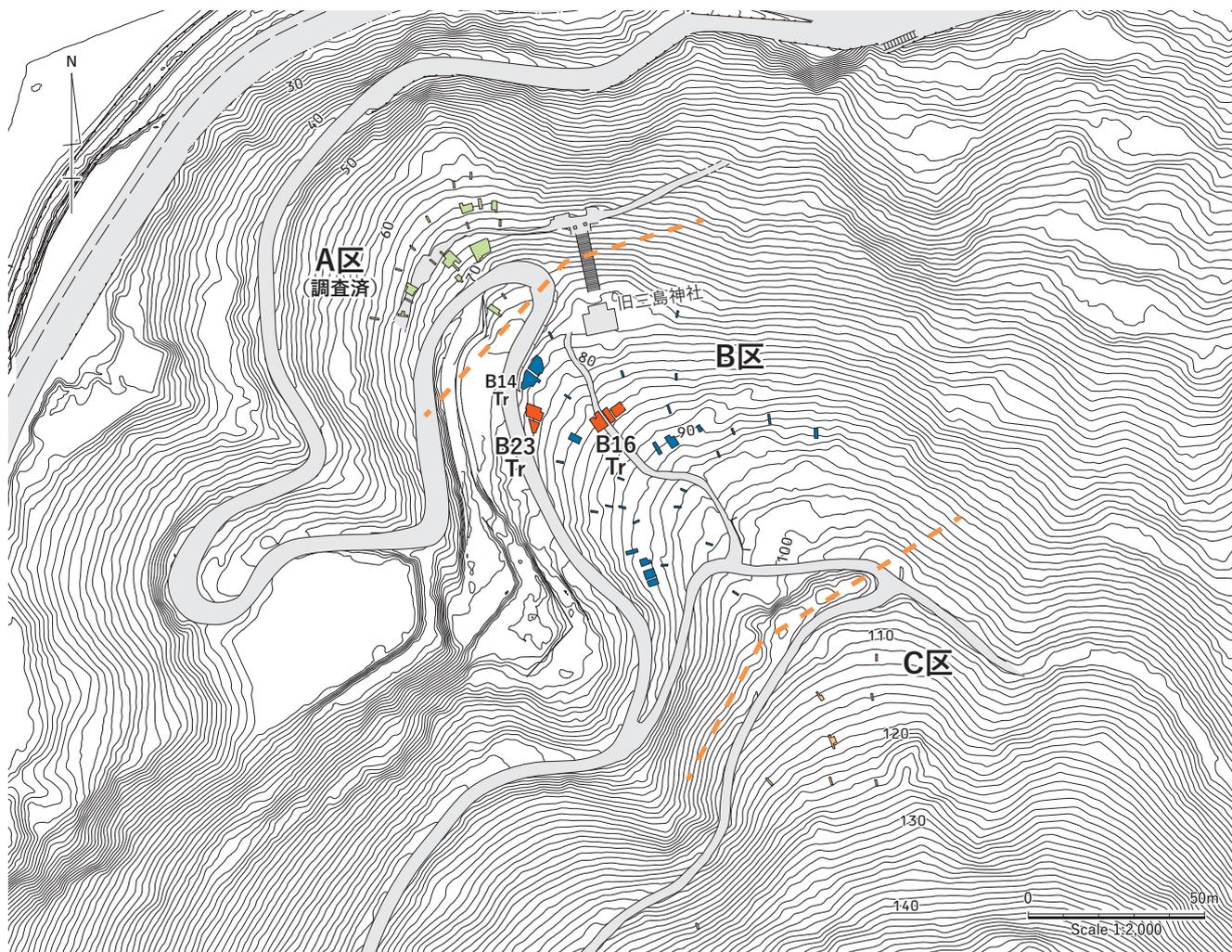
大洲市教育委員会 文化振興課

I. 調査の概要

調査名	村島宮の首遺跡 第9次調査	調査面積	約 57 m ²
所在地	大洲市菅田町菅田字村島	調査体制	
調査期間	令和6年4月19日～（継続中）	調査主体	大洲市教育委員会
調査目的と方法		調査指導	しもじょうのぶゆき 下條信行 愛媛大学名誉教授（考古学）

本遺跡は、弥生時代の石斧製作遺跡として学術的に重要な遺跡と考えられることから、遺跡の範囲の確認、遺跡の具体的様相の解明などを目的として、平成26(2014)年度から調査を実施しています。調査はA～Dの4つの地区に分けて行っており、今年度は標高約80～100mのB区の調査を実施しています。これまでの調査で、少なくとも約50×300mの範囲に遺跡が展開することを確認しています。

調査の方法は、まずトレンチ(Tr.)と呼ばれる細い溝を掘削して遺構の有無・内容を確認し、遺構が確認されたトレンチでは拡張して遺構を詳細に調査しています。これまでに各地区で合計65箇所のトレンチを調査しています。



村島宮の首遺跡 地形図

II. 調査の成果

1. 発見された遺構

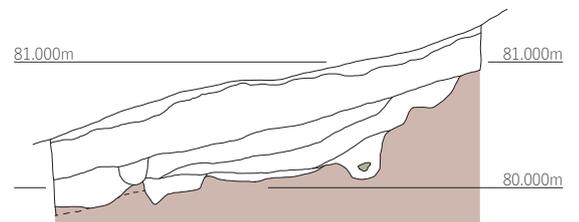
今年度調査を行っているB区では、新たに「^{だんじょういこう}段状遺構」が2基確認されました。段状遺構とは、傾斜地を削って平坦面を作り出した遺構で、これまでに13箇所のトレンチで確認されていますが、その用途や性格についてはよく分かっていません。本遺跡では、これまでに一般的な弥生集落に見られるような^{たてあな}竪穴建物(住居)が発見されておらず、段状遺構を多用した特異な集落形態だったと考えられます。

B23トレンチでは、道路によって一部破壊されていますが、段状遺構の約3分の2が検出されました。北西方向の谷部に開き、平面形は半楕円形を呈しています。検出した長さは約5mですが復元長は8.5mと推定されます。奥行も3.8m以上になる大型の遺構と考えられます。山側の壁面の高さは約70cmで、壁沿いには幅20～40cmの溝が検出されました。平坦面には27基のピット(柱穴)と^{どこう}土坑(大型の掘り込み)1基が検出されましたが、その並びに規則性はみられず、^{かまど}炉跡の痕跡なども確認されませんでした。

なお、B23トレンチから約10m北側のB14トレンチ(4次調査)でも、平面形が半楕円形で、長さ約8.6m、奥行4m以上となる、ほぼ同規模・同形状の大型の段状遺構が発見されています。



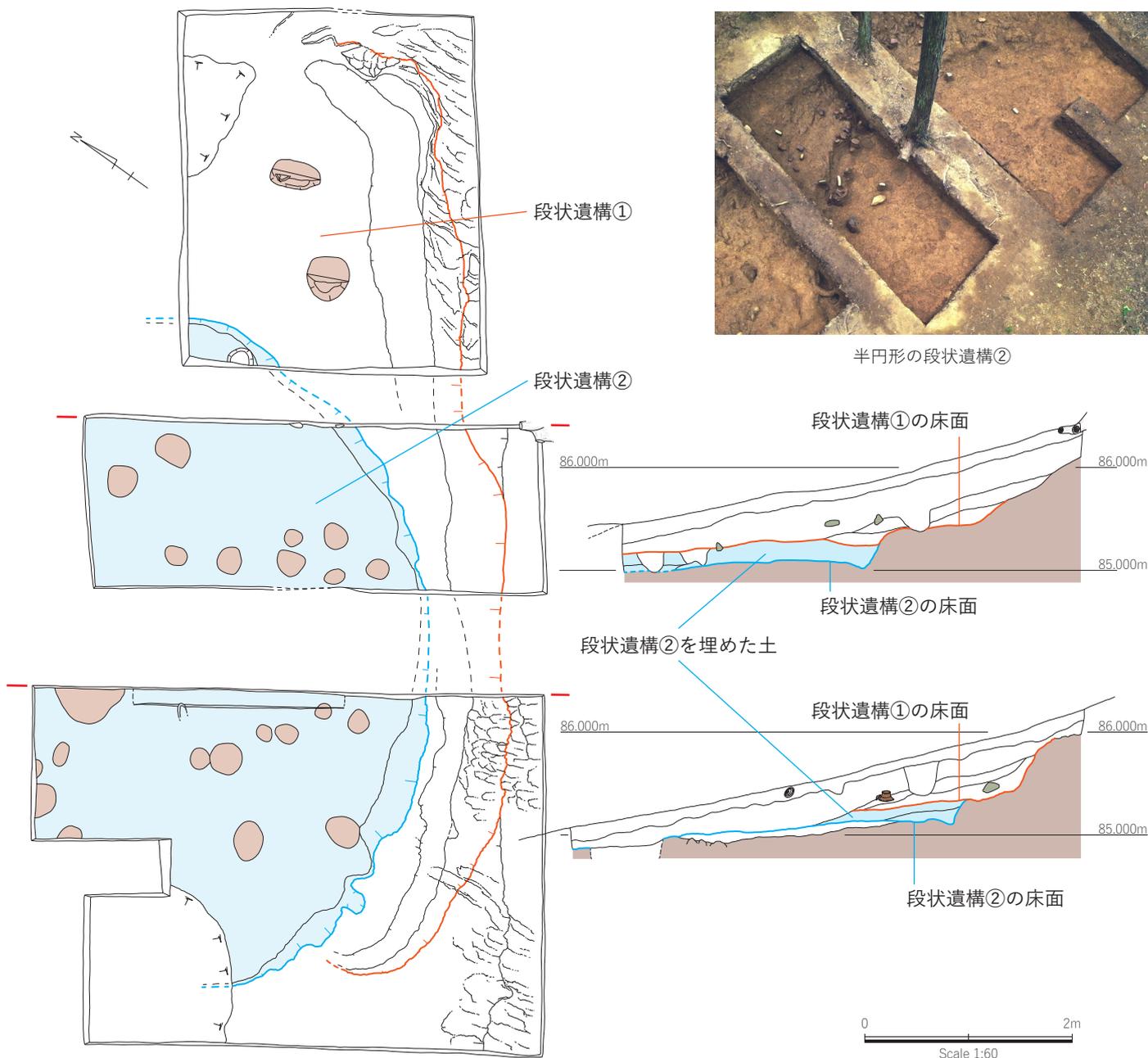
B23トレンチの段状遺構



B23トレンチ 平面図・断面図 ※調査中につき、今後修正が生じます。

B16トレンチでは、2つの段状遺構が確認されました。段状遺構①は4次調査までに確認され、東側部分が検出されていたものですが、今回の調査で全体形状が明らかになりました。北西方向に開き、平面形は隅が屈折した「コ」字形を呈しています。検出した長さは約9.5mで、奥行も2.6m以上になる大型の遺構と考えられます。山側の壁面の高さは約60cmで、壁沿いには幅20～50cmの浅くやや不明瞭な溝が検出されました。平坦面には2基のピット(柱穴^{ちゅうけつ})が検出されました。段状遺構②は今回の調査で新たに発見された段状遺構です。北西方向に開き、平面形は半円形を呈しています。検出した長さは約6.5mで、奥行も3.8m以上となる大型の遺構と考えられます。山側の壁面の高さは約30cmで、平坦面は調査中ですがこれまでに21基のピット(柱穴)が確認されています。

段状遺構①と②は先後の関係にあり、地層の状況から②が先にあって、これを埋めて新たに①が作られたと考えられます。段状遺構②は、①を作る際の掘削土で埋められたとみられ、埋められた後はそのまま①の床面として使用されたと考えられます。また、段状遺構②は内部からの遺物の出土が少なく、内部が片付けられたうで埋められた状況がうかがえます。これは段状遺構②から①への移行が、さほど時間を空けずに行われたことを示しており、段状遺構が②から①へ改造されたものと考えられます。



B16トレンチ 平面図・断面図 ※調査中につき、今後修正が生じます。

2. 出土した遺物

出土遺物で特徴的なのは石器類で、本遺跡では緑色玄武岩製の石斧と赤色珪質岩製の小型石器が多数製作されていたことが明らかになっていますが、今回の調査でもこれらが数多く出土しています。石斧は板状石斧と伐採石斧の2種類が製作されており、その未成品(製作途中で破損したもの)や、製作する際に出た剥片(石屑)などが出土しています。また、赤色珪質岩製の石鏃(矢じり)や、石核(石器の材料を剥ぎ取った原石)、剥片(石屑)なども出土しています。さらに石器製作に使用されたとと思われる砥石や叩石のほか、石庖丁なども出土しています。



板状石斧(左)と伐採石斧(右)

土器は壺、甕、高坏などの器種があり、南予地域から高知県にかけて分布する「西南四国型土器」を中心に、中予地域の影響を受けた土器なども出土しています。おおむね弥生時代中期中葉(約2,100年前)から中期後葉(約2,000年前)頃のものと考えられます。

III. まとめ

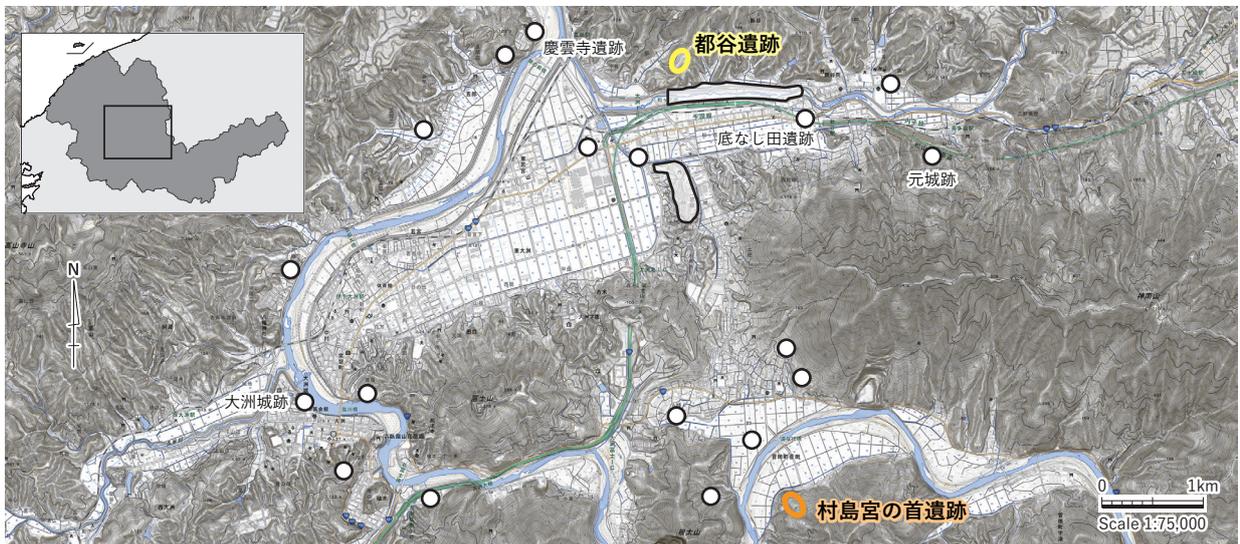
今回の調査において、新たな段状遺構が発見され、それぞれその形状や規模について把握できたことは大きな成果といえます。特に、B16トレンチで検出された半円形と「コ」字形の平面形の異なる段状遺構については、改造の痕跡と考えられるものであり、段状遺構の用途や形状の変遷を考えるうえで重要な成果といえます。

また、先に発見されているB14トレンチに加えて、B23トレンチやB16トレンチと、比較的近接して大型の段状遺構が展開していることが明らかになったのも大きな成果で、B区の出土遺物が他の地区よりも質・量ともに豊富であることなどからも、B区が本遺跡の中心域となる可能性が高いと考えられます。

一方で、竪穴建物のような明確な住居跡がまだ見つかっておらず、段状遺構の用途や性格とともに、今後解明していく必要があります。なお、ほぼ同時期の遺跡と考えられる都谷遺跡(大洲市新谷)においても、複数の段状遺構が発見されていることから、段状遺構を多用した集落形態は大洲地域に共通する要素となる可能性もあり、今後検証を進めていく必要があります。



B14Tr で検出した段状遺構



大洲市内の主な弥生時代遺跡分布図 ※地理院地図を加工して作成